

真・探り合い 2

※ 91「探り合い」のifとなります。本編ではありません。

どうすべきか？ 勝行の所へ行くか、それとも拒絶するか。

「すー……はー……」

深呼吸をして一旦冷静になろうとする。

今、自分が置かれている状況をもう一度整理する。

綾子に弱みを握られていて、それを挽回しようと荷物を探っているところを勝行に見られた。

そこまでは事実。だが、証拠は？

無い。

あの時、勝行は何も手にしていなかった。スマホやカメラの類など持っていない。

真奈自身、突発的に思いついた行動だし、事前に録画機器を用意できるはずもない。ならば冤罪を主張できるのでは？

漁った、漁っていない、誤解だ、見間違いだの水掛け論。綾子がどちらの意見を採用するかはわからないが、ことが大きくなれば勝行は自分の意見を引っ込めるだろう。

一対一なら不利かもしれないが、他の人が居る場所なら保身の為に自分の意見を引っ込めるはず。一度でも言質を取れば、勝行もうかつなことはできないはず。

担任の舘脇真一は厳しい所もあるけれど生徒の味方にもなってくれる人だ。教員同士であっても軋轢を気にせずに意見する。だから頼ればいい。勝行に変な疑いを掛けられて困っている。その時に今回のことを持ち出せば、真一にも相談しやすくなる。

勝行は人が居る事を嫌がる。今日だって徹や健介が来たら途端に不機嫌になった。手を出すこともできないへたれた性格だ。徹は今だって自分の味方で居てくれるし、信じられる。

「よし……」

これ以上の問題を抱えない為にも安易に屈服しないと誓う真奈。

日中の労働の疲れと汚れと一緒に昨日までの不安を拭い去りたい。夕食までの時間にお言葉に甘えてお風呂に入って来るのもいい。

真奈はタオル片手に風呂場へと向かった……。

誰かの声がした。徹の声だ。

昔は一緒にお風呂に入っていたけれど、さすがに今また入るのは気が退ける。棚を見ると睦美の衣服が畳んである。彼女はきつと新しいほうの風呂を使っているのだろう。

睦美のことはよく知らない。真面目な委員長タイプの子という印象があるだけで、ろくに話したことも無い。だから、彼女が徹のことを気にしているのを聞いて意外だった。昨日の様子を見ても睦美は徹のことを弟扱いにしかしていなかったのに。

「……」

旧浴場が騒がしい。きっと健介が一緒なのだろう。二人ともまだまだやんちゃだと思う。そんな彼らにこれ以上心配されるのも癪でもあった。

「よし」

そんな気持ちを振り払い、真奈はお風呂場へと向かった。

お風呂場に来ると睦美の姿は無かった。新風呂は救急の際の搬送用非常口があり、トイレともつながっているの、そこに居るのかとあまり気にしなかった。

新しいほうの浴場は広く温かみのある黄色を基調とした室内だった。

旧浴場と違い浴槽自体は小さいけれど複数ある。ジャグジーと電気風呂があると聞いていたが、今日はどちらも水が抜かれている。

新設備が使えないのはがっかりだけれど、家の風呂よりずっと大きいので身体を伸ばして浸かれるのがあるがたい。

湯気がゆらめく浴槽を背に、早速身体を洗う。

埃と汗でべたつく身体を洗い流し、ついでにシャンプーを使う。高めの温度のシャワーのおかげか泡立ちもよく、すぐに全身泡だらけになる。これでは壁の向こうではしゃいでいる二人を笑えないと思いつつ、カガミに自分を映してくすりと笑う。まるで特撮の女怪物。軽くポーズを取ったところで泡が目染みた。

「……」

シャワーを探して歩き回る。自分の家と違ってかつてがわからず、あたふたと手を伸ばしていた。

「シャワーシャワー……」

するとがらっと音がした。睦美がトイレから出てきてくれたのだろう。

「ねえ、シャワーお願い」

ちやうど良かったと気配の方に頼むと、すぐに熱いシャワーがかけられた。

「……ふう……ありがと……え？ 高島さんじゃない……、先生？ どうして……」

そこに居たのは巨乳の同級生ではなく、浅黒い肌の男性。風呂場らしく一糸まとわぬ恰好で当然前も隠さない。ぽろんと垂れたチンポは黒ずんだ皮に隠れていて、それがポンプで空気でも入れられているのかずんずんと上下しながら勃起し始める。

「やだ……なんで……ここに、ここは今私が……」

「別に女湯というわけじゃないだろ？ それに先に入っていたのは先生だ。後から来たってことは、先生が居るところに入りたかったってことだろ？ ふふん」

「な、そんな馬鹿なことあるわけ……」

反射的に胸を隠し、踵を返して走り出す。だが泡が足の裏を滑らせて上手く歩けない。対する勝行はずかずかと先回りし、戸に内側から鍵を掛ける。

「考えた結果だろ？ ふふん」

電気を消し、常夜灯の明かりのみとなる浴場。勝行は真奈の腕を取り、できるだけ入口から遠ざかる。

「痛い。放して！」

「静かにしなさい。お前も覚悟して来たんだろうが」

「覚悟なんて……私はそんなつもりないです！」

「なら、今野が昨日中倉の鞆を漁っていたことをばらしていんだな？」

「そ、んなの、先生の見間違いです。私、そんなことしてません」

「ほう、しらばつくれるつもりか……。先生、ちゃんと今野がイタズラしていたところを撮影していたんだぞ？ それでもしらばつくれるか？」

「え？ 嘘……」

「くく……。浅知恵だな、今野」

「一体どうやって？ それともただの嘘？ 自分を追いつめる為に適当なことを言っているだけかもしれない。だが、自信満々な勝行の態度を見る限り、全くのでまかせとも思えない。」

「そんな……、本当……ですか？」

「ああ。今野がイタズラをしていたところがばっちり映っている」

「ウソ。しょ、証拠はあるんですか……」

声が震えていた。寒さのせいではなく、足元が揺らぐ不安のせい。

「あるぞ。カメラにしっかりと記録してある。くくく……。ま、信じたくないならそれはそれでいいぞ？ 逆に今野の方こそ何も証拠が無いな」

「なんの証拠ですか？」

「今こうして二人で居ることだ」

「くく……」

今二人でお風呂場に居ること。もしこのことが公になれば教員としての勝行に立場は無いけれど、それをどうやって証明するのか？ 自分一人では水掛け論に過ぎず、勝算は薄い。

「……と、隣に徹が居ます……。大声出せば、徹が……」

「ふふん？ それはどうかなあ……。高杉が証言してくれるかな？」

「なに言ってるんですか。当たり前じゃないですか……。徹はいつだって私のことを」
助けてくれる。そう思った瞬間、震えが止まった。そうだ。徹が居る。壁をまたいで徹が居るのだ。声こそ聞こえないけれど、壁を何度か叩けば異変に気付く。鍵がかかっていたとして、非常口からでも来てくれるはず。むしろ有利なのは自分の方。

そう結論付ける真奈だが、勝行は嗤いを隠さない。

「高嶋……あいつ確か私立受験をするつもりなんだ」

「？ それがどうしましたか？」

急に睦美の話を始める勝行に真奈は眉を顰める。徹の話ならともかく、どうして家出娘如

きの進路のことを？ 今何に関係するのだろうかかわからない。だが、そこに彼の嗤いの余裕があるのかもしれない、続く言葉を待つ。

「それに学童保育を頼むつもりなのかな？ 主任がそんな話をしていてなあ」
「……」

「だが、ああいうのはスキャンダルを嫌うもんだ」

普段の彼女は知らないけれど、クラス委員を務めて学業優秀な睦美なら特に何も問題は無いように思える。だが、それでも勝行は不敵な嗤いのまま。何か時間稼ぎでもしているのかと勘繰りたくなる。

「例えば、不純異性行為とかな……、壁に耳をつけてごらん」

「壁？ 何が……」

隣はどうせ徹と健介がはしゃいでいるだけのこと。そう思い耳をつけると、聞こえてきたのは甲高い声。

耳に絡みつくような高い声と犬がはしゃいでいる時のような弾んだ息。片方は徹。もう片方は健介ではないとわかる。なら誰だろう？ 女子？ 今居る女子は自分か高島睦美、ただ一人。それはすなわち……。

「こっちに来なさい」

隣の様子を察したことで今度は非常口の方へ手招きされる。真奈はタオルで胸元と股間を隠しつつ、言われるままについて行った。

非常口からトイレ脇にあった脚立に乗る。換気用の窓から隣の旧浴場を見ると、かろうじて開いている隙間から二つの肌が絡み合うのが見えた。

「え……」

「しっ」

声を上げそうになったところを塞がれた。その間も瞬きできずに視線の先を見る。顔が見えた。それがもう一つの顔に近づく。音こそ聞こえないけれど、何かねちねちと交わしているのが見える。しっこく確かめるように角度を変えて何度も……。

「え……どういう……こと？」

何をしているのだろう。こんな時間にお風呂場で裸の男子と女子が顔を合わせて、身体を近づけて……？

「くくく、風呂場でセックスとは二人とも気が早いな」

「な、セックスって……、ウソ、徹がなんで高島さんと？ だって二人とも」

「さあなあ。先生もよくわからんが、いつの間にか二人ともやってたんだよ」

「そんな……こんなことって……」

瞬きをしばらく忘れていた。湿度のせいで乾きこそしないけれど、思い出したように目を瞑る。

視界が暗くなると同時に頭が重くなる。痛みはない。ただ、とにかく重い。何か鉛でも内側に埋め込まれたように。

悲しいのだろうか？　そういうわけではない。徹のことは好きだけれど、そういう感情は考えたことも無い。けれど、その彼が他の女の子と身体を重ねている。

保健の授業ではひたすら愛を強調して美しい行為として教えられていたけれど、今目の前で見ている二人の行為は変な声を出しながら体をぶつけあっているだけ。時折見かける喧嘩のよう。せいぜい相撲。美しいとは言い難いもの。

時折やんちゃな態度を見せる徹だけに、まるで赤ちゃん返りしてるかのよう。酷く情けないような気がしてしまう。

「くくく……。二人ともやることやってんだな……」

「それがどうしたって言うんですか……」

「気付かないのか？　よく考えてみなさい。公民館で不純異性交遊しているようなことが知られたらどうなると思う？　睦美がしようとしている私立受験やら学童保育どころじゃないだろ？　そういうことだ」

「それが……」

「乳繰り合ってる女と今野、高杉はどっちを守らと思う？」

「え？」

「今野は高杉にエッチさせてないんだろ？　だからああやって他の女とセックスして欲求不満を解消してるんじゃないか。高島もノリノリだぞ？　さっき見てたけど、高島の方から誘ってたしな」

「だから、何が言いたいんですか……」

困惑で頭が上手く働かない。睦美と徹がセックスをしていることに一体どんな意味が？　ただの性欲処理……。その性欲処理ができるのであれば、二人は特別な関係であり、それを邪魔する者がいたとして……？

連想ゲームのように一つ一つゆっくり考える。その内にだんだんと顔が強張る。それに気づいたのか勝行はにやりと嗤う。

「今野が騒ぎ立てたとして、その時に高杉は本当にお前の力になってくれるか？　高島の方を優先するんじゃないか？」

絶対ではないけれどその可能性はある。徹は優しいし頼りになるけれど、自分一人に対して優しいわけではない。他の困っている子にも同じように優しい。さらに今、彼は睦美と特別な関係になっている。失う物の大きさを考えれば睦美と自分ではどちらが上か？　その時徹は誰を優先して守ってくれるのか……？

徹を疑いたくはないけれど、それでも自分を睦美と同じように守ってくれるとは思えない。それどころか徹が勝行の言いなりになるかもしれない。それは一見自分に関係無い被害のようにも思えるけれど、徹が勝行の側に立つと言うことは結局巡り巡って……？

ありえないこともない。可能性がある。蓋然性を考えても、今こうやって裸で生徒の前に立つような勝行ではそれも考えられる。そもそも不純異性交遊を指導するような人間がのんきに覗きをしているはずがない。何か使えると思っっているからこそこうやって見逃している

のだ。

むしろ今の時点で既に自分は詰んでいるのかもしれない……。

「どうした？ そんなにボーイフレンドのセックスが刺激的だったか？」

背後から手が伸びる。しばらく裸で待っていたのか、彼の手は冷たく固い。それが乳房に這い回り、ゆっくりと指を沈ませてくる。

「いや、放して……」

「くく、そういうな。今野だって同級生の交尾を見て興奮してるんだろ？」

「そんなことありません。放してください」

振り払い立ち上がる。けれどすぐさま腕を掴まれる。

中年太りしているとはいえ勝行の腕力には敵わない。さらに捻られるように掴まれ痛みに顔が歪んでしまう。

「くく……あそこも濡れてるじゃないか？」

「これはシャワーで……」

「そうか？ なら確かめてやろう……」

勝行の手が股間に伸ばされると、水でべたんと張り付いた陰毛がかき回され、そして割れ目に指が触れる。



「んっ……イタイです……やめて……んっ！」

遠慮なく伸びた手に真奈は痛みを感じていた。乱暴な触り方には恐怖のほうが強いの。けれどそれを跳ねのけることもできない。

お腹の辺りに勃起したチンポがあてがわれる。先っぽからぬるつとした粘液がこぼれ、それがお腹に伝わり、お湯に混じってさらに下降して股間を目指す。

性的な意味合いを持つ生臭い汁が股間を目指す。その事実には怯えた真奈はそれを跳ねのけようと手で払う。

隠そうとしていたおっぱいがこぼれてプルンと揺れる。相変わらずの陥没乳首は不格好だけれど、勝行はそれを愉しもうとがっちりつかむ。

「んっ……ああん……やめ、触らないで！」

「とかなんとか言って、今野だつてやりたいさかりだろ？　こんなでかいおっぱいしてなあ……。先生が揉んであげるんだぞ。」

ぐりぐりと揉まれると痛みばかりが強調される。身体をよじって逃れたいけれど、その仕草はお腹に当たる勝行のチンポを刺激するばかり。淫らな臭いのするぬめり汁がお腹に広がると、それがどんだん体の内側に浸食していくようで気が気でない。

「やめ……んっ……ああん……やめて……」

痛いと思っていたのに揉まれていくうちにくすぐったさが強くなる。軽く羽根でなぞられるような錯覚から始まり、だんだんと刺激が強くなる。

「んっ、んふう……くう……ああん……だめえ、触らないで……やめてください。」

拒む言葉に力は無く、内側に響く刺激に徐々に痛みが消えていく。

「立ちなさい。」

しゃがみ込む真奈を引っ張り立たせ、風呂場へと戻る。

電気を消された浴場、ドアに鍵もかかっており誰かが来る気配も無い。

勝行は浴槽の縁に腰掛けると彼女を抱きかかえる。当然真奈も抵抗を見せるが、彼の手が股間に伸びた時、びりつとした刺激に身体を硬直させる。

「んっ！　んう……やめ……」

割れ目を這い回る勝行の指先。最初こそぬるりと滑る程度だけれど、割れ目を捲りあげて内側の汁を掻きだすと、ねちゃねちゃと音を立て始める。

「んうふうん……やめ……ああん……だめ……なんか……先生、変な気分になって……ああん、やめ……」

真奈が苦悶に声を漏らすと太ももに触れたチンポがぎんと力む。その熱さと硬さに太腿の方に目が行ってしまう。

包皮に包まれたチンポは包茎と言うはず。それが真奈の動きに合わせて先端が捲れて赤いものを見せる。

「くくく、気になるか？　先生のチンポ。」

「そんなこと……ありません……。そんなことより、放してください。あたし、このことを他の人に……」

「他の人が呼べるか？　ここの公民館の奴らは皆面倒くさがりだからな。どうせ今野の勘違いで済まされるぞ？」

「そんなこと、やってみなきゃ……」

「くくく」

不穩に笑う勝行に真奈は彼を睨む。

「やってみなきやって思うならなんでやらないんだ？　今野、お前は意気地が無いんだよ。だからできない。中倉の荷物を漁っていたのだってそういうことだ。お前は自分じゃ何もできないんだよ」

「そんな、そんなこと……」

思えばそうかもしれない。

綾子の件に関しても誰かに相談していれば良いのに恥かしさでそれができない。そもそもの始まりも体格で負けていないはずなのに綾子に良い様にされたこと。祐樹如きグーで殴ればあんなことになるはずが無かったのに。

それなのに自分は碌な抵抗ができなかった。理由は勝行の言うとおりで。自分には意気地がない。

なんとか一念発起しようとしても結局は成果も得られず、逆にこうして深みにはまる。今こうしておっぱいを弄られているのも、おまんこを弄られているのも全ては自分の意気地の無さが原因。

「あたし、あたし……うう……」

思い返すと涙が出てくる。身体は大きくなっても歪なままの心は気弱なまま。声を上げることもできず、助けを呼ぶことも信じることもできずにこうして俯くばかり。

「なあ今野。悪い事は言わん。先生の言うとおりにしなさい」
すると勝行が頭を撫でて来た。

「言うとおり……？」

「そう。先生だって鬼じゃない。ちょっと今野と気持ち良くなりたいんだ。今野にも気持ち良くなってもらいたい。先生は今野のことが好きだからな」

「え……好きって……言われても……困ります」

急に声のトーンが優しくなり、笑顔を見せる勝行に困惑を隠せない。だが、先ほどの追い詰められた気持ちにもゆとりが生まれる。

「先生も男だからな。こうして今野みたいな可愛くてセクシーな女の子に興味があるんだよ。それはしょうがない事だ」

「……」

「おっぱいだって大きいし、こうして触ると今野だって気持ち良いだろ？　ん？」

「んっ……ああん……くふうん……先生、急に……あっ……はあん」

おっぱいを優しく回すように揉まれるとくすぐったさが強くなる。同時にお腹の奥が熱くなり、ぬるっとしたものが股間から溢れてぬちゅっと音を立てる。

「中倉が何か悪いことをしているのは先生も良く知っている。あいつは生意気だからな。だから少しお灸をすえないといけない。そう思うだろ？」

「……それは……はい、思います」

「だろ？ だから今野、先生に協力しないか？ 今野は中倉に嫌なことをされたんだろ？ 先生もそういうイジメを看過できない。今野は少し前から中倉を怖がってる感じがしたから気になっていたんだ」

「……はい」

「やっぱりそうなんだな。なあ今野、先生と一緒にがんばろうじゃないか。中倉と一緒に懲らしめよう。そのついでに今野が探してる物を没収する。そうすれば安心だろ？」

「はい」

「なら話は早いじゃないか。今野、先生と一緒に頑張ろう。な？」

「はい、わかりました。あたし、頑張ります」

ぱっと顔が明るくなる。もしかしたら綾子の件をどうにかできるかもしれない。勝行とて教員だ。綾子の横暴を指導すべき立場でもある。ならば正当な頼るべき存在なのだし、勝行に頼むことこそ正しい選択。そう思えた。

「なら話は早い。今野、協力するんだし、お互いのことをよく知ろうじゃないか？」

「え……それはどういう……んっ、むちゅ……んちゅ」

立ち上がると同時にまたも肩を抱き寄せられ、強引に唇を奪われる。咄嗟のことに身体が動かず、固いそれがむぎゅうと押し付けられた。

「んちゅ……ちゅ……んちゅ……ちゅ……ちゅ！」

唇を吸われていると思ったら今度はぬるっと妙な固さ、蠢くモノがねじ込まれる。生暖かく、ぬめぬめするそれは真奈の口腔内を探るように動き回り、そして舌に触れた。

「んうゝ、んっ……んっ……ちゅ……ちゅべろ……んむ、あむう……な……先生、急に……んちゅ……ちゅ」

酸素を求めて口を離すもすぐまたキスされた。

ぬらっと伸びた唾液は勝行の舌に繋がっている。キスの時、舌を入られたのだと知り、今こうして口腔内を暴れ回っているモノの正体を知る。

「んちゅ……ちゅ……ちゅべろ、ちゅ……ふはあ……はあ……酷い……なんでこんな……んちゅ……ちゅ」

「ちゅべろ……んちゅ……はあはあ……、今野のことをよく知りたいからな……こうして……隅々まで……」

十分なキスをするとう度は椅子に座らされる。

「先生……なにを……やめ……」

膝を掴まれ強引に股を開かれる。固い陰毛の茂みに隠れた割れ目にひざまずく勝行の顔が

近づき、そしてまた舌が伸びる。

「やめ……何を……あ、ああん！ んっ！ やだ、そんなところ……舐めないで！」
割れ目への不可解な刺激に真奈は声を上げていた。陰唇を舐める勝行の舌。温かく、ぬるりとぬめつていて、触れる度に背筋がぞくぞくさせられる。

「んちゅ、べろべろ……ちゅ……べろ……ちゅずう……ずず……ちゅう」

「んっ、ああん……んう、変なところ……ああん、なんで？ なんでそんな……ああん」
おしっこをするところを舐められる恥かしさ。同時にそれで生まれる甘い刺激。
ぬちゅぬちゅ音を立てながら唾液に自分のおしっこは違う粘液が混ざっているのがわかる。

「んちゅ……べろちゅ……今野のまんこはおいしいなあ……。しかし、意外だな。処女だったなんてなあ」

「んっ……処女って……あたし、そんなふしだらなことしません……」

「くく、おっぱいはこんなにふしだらなのになあ……」

股間から真奈を見上げる勝行はおっぱいに手を伸ばし、乳輪を弄り、少し抓む。

「んう……ああん……やあん……おっぱい、そんなふうに触らないでください……んっ……ああん」

おっぱいを下から揉み上げる勝行の手。お湯で滑らかに滑り、陥没した乳首の表面を優しくなぞっていく。



「んっ……んっ……はぁん、先生……やめて……んっ……なんか……変……イタイですってば……」

「ん？ どこが痛い？ 教えてくれないとわからないぞ……」

「だって、先生……あたしの……お……お……お、おっぱい……」

「おっぱいがどうした？ なんだ、おっぱいをもっと触ってもらいたいのか？ ん？」

「あぁん、なんか……おっぱい触れてると、変な気分になるんです……んふう」

拒もうと勝行の手を掴むもぬるぬるした粘液塗れの手はつかめない。それどころか彼の手はおっぱい以外にもお腹、背中へと這い回り、ぬるぬる滑る粘液が身体に塗りたいくらいく。

「んうふうん……やめ……あっ！ ちょ、せんせい……あ、そんなところ！ おし、おしりにさわっちゃいやです……あっんっ」

ぬちゅぬちゅした粘液の冷たさがお尻の内側へと忍び寄る。

おっぱいを触られていていつの間にか前のめりになっていたこともあり、無防備にさらされたお尻の穴に勝行の指が触れた。

途端、きゅっとお尻の穴を窄め身体を抱きしめる。泡とぬるぬるだらけの身体を前に勝行は遠慮なく真奈を撫で回していた。

「どうした……。先生にちゃんと教えなさい。信頼関係が大事なんだぞ」

「はい、その、お尻……触れると、なんか、きゅってなつて……それで……声が出ちゃいました」

「ふん。ちゃんと言えるじゃないか。今度からは気持ち良くなったら言うんだぞ」

「……はい」

真奈を立たせたまま勝行はしゃがみ込む。その視線が彼女の股間の辺りになったところで腰を掴み、顔を近づける。

「きゃっ、何をするつもりですか！？ やめて……んっ……あぁん！」

体液でぬるぬるになった真奈の股間に勝行は顔を埋める。そして割れ目に舌を伸ばすとぺろぺろと舐め始めた。

「んっ、ひゃっ、やめ……んっ……あぁん」

「今野、言いなさい。ぺろ……ちゅ……ぺろぺろ」

「んっ、あ、すみません……、あっ、きもち……んっ、いいです……」

強い口調に従ってしまう。そうでなくともぬるぬるになった股間を生暖かい舌でぺろぺろと舐められるとくすぐったくてキモチイイ。もう少し強く吸われたら声が激しく漏れてしまいそう。

「んちゅ、ぺろぺろ……あむ……ちゅ、はぁ、今野のマンコはぬるぬるだなあ……。どうだ？ 先生に舐められてキモチイいの？」

「んっ、はい……気持ちいいです……先生に、おまんこ……舐められて……あたし、なんか身体……ぼうつとして……うかんできちゃいます……あ、そこ……そこ舐められると」

割れ目の上の方、包皮で隠れた部分を舌先で軽く撫でられたとき、再び強い刺激が身体を走る。そこだけが別格なような快感があり、お腹の奥がジュンと湿るのがわかる。

「ああん……先生、そこ……あんまり……んっ！ ひゃっ！」

しゃっくりのような悲鳴を繰り返しかくかく身体を震わせる真奈。そろそろ立っていられないのか、勝行の肩に手を突いて前のめりになっていた。

「どうした？ ダメじゃないか？ ん？ ここを舐められたぐらいで……ちゅ、ぺろぺろ

……うん、今野のマンコは美味しいぞ……」

「んっ、だめえ……あ、だめ、先生！ あっ！ いく！ いく！！」

背筋を反らせて真奈はびくっと肩を震わせる。しばらくつま先立ちになったと思うと前に崩れ、そのまま肩で息をしていた。

「はあああ……んっ……はあああ……」

「だらしないなあ……。ほら、座りなさい……」

言われるまま椅子に座らされる。イッタせいか自然と汁が股の割れ目からこぼれてくるのがわかる。どこかおしっこみたいで恥ずかしく、真奈は足を閉じてそれを隠そうとする。





「何を隠しているんだ？ 見せなさい……」

「や、いや……やめ」

拒もうにも身体に力が入らない。勝行は彼女の内腿を強引に開き、滴る汁を見てにやつく。
「くく、なんだ、お汁がだらだらじゃないか？ 今野。まるでおいっこだ。今野はおもらし女なんだなあ……くく……」

「そんなこと言わないで……いや……恥ずかしいです……」

「恥ずかしいもなにも今野のお母が悪いんだ。こんなに濡らして……どれ、どんな味だろうな？ 先生が舐めてあげるぞ」

「やだ、やめ……んっ……ああん、先生、おマンコ舐めないで……んっ、だめ……あっ、やだ、吸わないで……んっ……凄い恥ずかしいんです！」

「ぺろぺろちゅずず……ずずう……」

わざとらしく音を立てて汁を吸う。生臭く饅えた臭いのする愛液は吸う度に置くから滲みでてしまい、ぬらあっと糸を引く。

「ちゅば……んーむ、なんかすごいな、今野のマンコは……。納豆だってこんなにねばつかないぞ？ こんなべたべたなんてお前は どうしてこんなスケベな女なんだ？」

「あたし、スケベなんかじゃ……」

「こんなにべとべとにしてスケベじゃないと言うのか？ ん？ こんなにべとべとで」

「酷い、恥ずかしいです……。エッチなこと言わないでください……」

真っ赤になりながらこぼす真奈だけれど勝行は舌を止めない。じゅびずば汁を吸い、喉をごくりとならす。

逃れようとするもぬかるみで滑り、椅子から落ちて尻餅をつく。立ち上がるうにも手もお尻も滑り、そのまま横たわってしまう。

「今野。危ないぞ。風呂場でこけるなんて」

「ごめんなさい……あたし……んっ……あ……んっ」

乳首を何度も弄られている内にぶくつと突起が起き上がる。普段は乳房に埋没しているのに、エッチな気持ちになると途端にこうなる恥かしいモノ。

「カワイイ乳首じゃないか……くく」

勝行は見慣れないペットボトルを手に取り、ぬるぬるの液体を手に伸ばし、それを真奈に向ける。

「んっ……なにこれ……気持ち悪い……ぬるぬるして……る……んっ……」

ぬるぬるは真奈のおっぱいに塗られたくられ、勝行の武骨な手でもぬちゅぬちゅ音を立ててまるで軟体動物のように揉み解されていた。

「……やめ……ああん……なにこれ……んっ……変なの……変……あっ、あっ……」

おっぱいを揉まれる内に痛みはもう感じなくなっていた。それどころかじんと身体の内側に響く甘い刺激。特に乳首周りをくすぐられると強く感じてしまう。

「んっ……ああん……んっ……せんせい、やめて……もう……だめえ……」

かろうじて拒む気持ちを呟くも、身体は確な抵抗も見せない。

内股を閉じてもじもじするのも拒むためというよりはくすぐたさを少しでも自分で刺激したいがため。勝行の手が伸びた時、真奈はその手を拒めなかった。

「今野は毛も濃いなあ」

「先生、せくはらです……そんなこと……酷い……気にしてるのに……」

「くっくっく、それは悪かったな。でも、これじゃローション要らないぐらいぬるぬるじゃないか……。なあ？」

「んっ……やめて……触らないで……」

「でも今野のここは触られたがってるぞ……ん？」

「そんなこと……ないです……んっ！ ああん……」

内股を弄る勝行の手。険しい叢をかき分け、じよりぬちゅさせながら割れ目へと触れた。

「ああん！ っ！ んっ！ だめえ……ああん……」

「こら、静かにしなさい。みんなが来るだろう？」

「だって……だって……先生が変なところ触るから……おねがい、勘弁してください」

「ふーむ……、しょうがない子だな。お互いを知るためなんだから我慢しなさい」

「は……い、んっ……んっ……」

指で少しナゾルだけでも真奈は甘い声を漏らす。既に拒む気持ちも失せているらしく、た

ただただ身体を弄られることへの快感を求めているようにも見えた。

「さて、それじゃ今度は先生のも洗ってもらおうか？」

「え……」

「そうだろ。今野も先生のことをよく知らないとな。ほら、早くなさい」

「……んっ……はい……」

勝行は真奈を椅子から立たせると自分がすわる。そしてそのまま彼女を抱っこする。

「あ、あの、先生……何を？」

「先生の身体を洗ってもらおうと思ってな。今野の身体でだよ」

「や、そんなこといやです……やめ……」

勝行は持つてきていたペットボトルからぬるぬるとしたゲル状の液体を二人の間にかけだす。臭いは甘い苺のようなモノ。手に着くとそれはぷるんと震えてぬるゝつと伸びる。手触りが気持ち良く、冷えているのがやや難点だった。

「これなんです！？」

ペットボトルから粘液を垂らし、さらに彼女の身体にも塗り始める。

「んっ、ああん……なにこれ、べとべと……」



「よいしょっと」

勝行は真奈の身体を持ち上げると股間を前に出す。にゅるんと滑る熱いものが彼女の股間を撫でた。

「んっ！ やあん、なに今の……」

「先生のチンポだぞ。なんだそんなに気持ち良かったか？」

「や、だ……変態……こんなチンポなんて……んっ……やめ……」

割れ目付近に押し付けられる熱い肉の棒。ぐいぐいと腰に押し付けられると、割れ目が捲られて内側に触れてしまう。

「や、やだ……やめ……入っちゃったら……」

「ほらほら、早く先生の身体を洗わないと入っちゃうぞ？」

「いや……だぁ……やめ……んっ」

股間に触れる勃起チンポ。もはや勝行の目的に躊躇がないことに気付き、真奈は焦り始める。

いくら勝行でもそんなことまでしない……。

そんな予想は打ち破られ、このまま処女膜も……。

「ほら、先生のおちんちんを洗ってくれよ。じやないと膣で洗っちゃうぞ？」

「え……せんせいのおち……おちん……いやです……そんなこと……」

椅子に座ったまま股間をすりつける勝行。勃起したチンポは先っぽから粘液を滲ませ、真奈の割れ目を懐柔するかのようにねちゃねちゃとこすれ合う。

なまぐさい臭いを放ち、陰毛の中にそびえるチンポ。大きさはそれほどでもないが、勃起していることはつまり性的な興奮をしているということ。対象は当然……。

「やめ……そんなもの……あ……ん」

勝行は拒む真奈の手を引っ張り、強引にチンポを弄らせる。

「おう……いいぞ……あぁ……」

「い、いやぁ……」

泣き声になりつつチンポを弄る真奈。竿を撫で、陰囊をさするとドクンと脈動し、どろっと粘液を吐きだす。それはぬるぬると混ざり真奈の手を汚す。

「んっ、やだぁ……入れちゃやだ……」

「今野の身体は欲しがってるぞ？ ここひくひくしてるじゃないか？」

割れ目をなぞる指先が少しだけねじ込まれる。

「ひっ！ んっ……くうん……あっ……ああん」

膣内をかすかに撫でる指先に真奈は甘い吐息を漏らす。冷たく細い指先が触れただけでの刺激。これがもしこの包茎チンポだったらどうなるのだろうか？ 股で陰毛とよりじよりなぞり合うチンポをじっと見てしばし沈黙してしまう。

「どうした？ ちゃんとやらないと入れちゃうぞ？」

「だめですう、そんなこと……しちゃ……だめだもん……」

唇を噛み、頭を振る。勝行はその仕草を嗤っていたが、彼女自身、揺れていることが驚きだった。

「い、いれちゃだめだから……だめだし……ぜったいだめ……」

ごくりと唾を呑み、チンポを掴む。ぐいぐいと抜くと指先に汁を溢す。つんとはなをつく生臭さ。お腹の奥を湿らせる臭いに思考がまたも偏る。

「くく、ああ、気持ちいいぞ。今野……よし、今度は……」

椅子から降りて横になる勝行。チンポは天井よりやや右向きにそびえていた。

「さ、こっちに來なさい」

「でも……こんなこと……」

「來なさい」

「……はい……」

強く言われると身体が強張る。真奈は二度目の催促に抗えず、言われるまま彼に跨る。チンポを前にして自分の割れ目が広がるのを感じる。まさかとは思うが、このまま……？いくら勝行がセクハラ教員でもそんなこと……。

「そのまま仰向けになるんだぞ……、こうやって……」

「きゃっ……ああん……」

ぬるぬるでべとべとのお互いの身体。勝行が真奈のわきの下に手を伸ばして引っ張ると、そのまま倒れて密着してしまう。

「いやん……なにこれ……んっ……やだ……動かないで……あっ……んっ……」

お互いの身体で密着し、ぬるぬるで滑りながら前後する。

チンポがお腹の辺りで擦れ、おっぱいが圧迫される。

「んっ……やだ、やあん……先生、やめてよ……んっ……ああん」

「こうすれば一緒に身体を洗えるだろう？ ほらほら……」

ぬっちゅぬっちゅ、ずっぽじゅずぽ……。

ぬるぬるが互いの身体で滑り、圧迫しあい歪な音を立てる。

特に凸の激しい真奈のおっぱいは勝行の身体に弄られ、じんわりした快感を覚えてしまう。

「んっ、んっ、んっ……んっ……んっ……」

おっぱいを圧迫され続け、真奈は鼻息を荒げて言葉少なくなっていた。

「どうした？ 今野？ 気持ちいいのか？」

「んっ……んっ……んっ……はい……え？ あ、そんなことないです……」

「ははは……今野は意地っ張りだな……。気持ち良くなってるくせに……」

「ちょ……あん……ああん！」

意地を張る真奈を起こし、勝行は彼女の乳房を強めに揉み始める。

「いやん……そんなに強く……されたら……イタイ……んっ！ んっ……」

苦しそうな声とは裏腹に、真奈は深くため息をつき、肩をすくませて甘い声を漏らしてい

た。

「ああん……せんせい……やめ……んっあ」

勃起した乳首を指でつままれると、ぶりつとした刺激が身体を走り、真奈の口からは我慢しようとしても喘ぎ声が漏れてしまう。

「ああん……だめえ……なんで？　なんであたしこんな声……んっ……いたいだけなの……ああん、せんせい……やめ……ああん、あたしのおっぱい、そんなに弄らないでえん……ああん……やめてえ……はあん、あっ、あっ……」

勝行のお腹に当てていた手がぬるりと滑り、チンポに触れる。それをぎゅっと掴み、指で擦っていた。

「んっ、今野……気持ちいいぞ。いいぞ。うん、えらいえらい」

乳首を撫でていた勝行だが、彼女がチンポを弄り始めたことが嬉しいらしく、彼女の頭を撫でる。

「え、あ……はい……」

真奈はコクンと頷くと視線をそらし、唇を歪めていた。

「ん……今野……そうだ、手もキモチイイが、なあ、お前のおっぱいで挟んでくれよ。先生のチンポを今野のそのでっかいおっぱいで……」

「え……おっぱいで……先生のオチンチンを……。そんなのいやです……オチンチンをおっぱいで挟むなんて……だって……」

「ほら、早く……今野のデカイおっぱいで挟みなさい」

「……んっ……はい……先生……」

強い口調で言われると身体が竦む。真奈は言われるままに勝行のチンポをおっぱいで挟んだ。

「よし、よくできたぞ、今野。先生の言うことをきいて偉いなあ」

「んっ、はい……だって、んっ……こんなこと……させて……セクハラきようし……」

再び頭を撫でられた真奈は唇を尖らせ呟く。

「セクハラじゃないぞ。お互いを知るための行為だ。先生がセクハラをしたくなるぐらいおっぱいがでかい今野にだって問題があるんだぞ。さ、おっぱいで挟んだらチンポを上下に扱くんのだ。おっぱいでちゃんと扱くんのだ」

「こ、こうですか……」

おっぱいでチンポを挟み込み、手で上下に揺らしてみる。

「お、お、いいぞ……ああすごい。真奈のかでかおっぱいが揺れて迫力ある。先生のチンポも喜んでるぞ」

「そ、そうなんですか……こうですか？」

上機嫌な勝行の声に真奈は鼻息をならし、さらにおっぱいを揺さぶる。

ねちゃねちゃんちゅぬちゅ……ぬちゅちゅ……ぺちやぶちゅ……。

粘液がねばりあい、卑猥な音を立てていた。チンポの先っぽからは粘液がこぼれ、それは

真奈のおっぱいに刷り込まれていくように広がっていく。

「んっ……なんか……んっ、変な臭い……んっ……あん、せんせいのチンポ、乳首にさわりました……んっ……」

乳首にチンポをあてるとピリツとして気持ちが良い。乳首でわざとチンポを刺激しつづけると、真奈は下半身が熱くなるのを感じてしまう。

「んっ……はああん……なんか……変……なんでおっぱいでおちんちん弄ってるだけなのに……んっ……っ……」

先っぽからびゅっと白濁した汁が走った。

「きゃっ……んっ……なにこれ……」

それは顔にかかり、とろっと流れて唇に伝う。

「いやだ……なにこれ……にがい……まさか精子……」

「違う違う……ただの我慢汁だ。ほら、続けなさい……」

「我慢汁……んっ……やだ、口、すぎたいです……うがいさせ……んぐく……」

しゃべっているせいで逆に口の中に汁が滑り込んでいく。ぐくりと喉を鳴らしたところでもたびゅっと白い汁。

「ん……やだ……せんせい……我慢してよ……んっ……、また口に入っちゃった……んっ……ぺ……」

「う……いいぞ、真奈。真奈のデカイだけのバカおっぱい、先生のチンポ気持ち良くしてるぞ……さ、もっとだ……ほら、頑張って」

「は、はい……んしょんしょ……」

急かされ、乳首で亀頭を攻めまくる。ぬるぬるした粘液が乳首に塗りにくられ、どろっどろっと汁が飛ぶ。

「う、う……」

おっぱいに伝わるチンポの熱さ。力強い脈動。自分のおっぱいで男の人がどうなってしまうのか好奇心が湧いてしまい、真奈はチンポから目が離せない。

「んっ……んっ……せんせい……どうしたんですか……ね、せんせい……あっ、あっ……きゃ！ きゃ！ せんせい！ やだ、精子！ ああん、出てる！」

おっぱいで根元まで刺激してから先っぽまでぬるりと締め上げる。さらにおっぱいで圧迫して根本に引っ張ろうとしたらチンポの先っぽがずるっと剥けて赤みの残るミミズの頭のようなモノが顔を出した。それをまたおっぱいで挟んだらビクンと震え、びゅびゅっと白い液体を吐き出した。

「きゃ、んっ、やだ……んう……ああん……ぶ、ぺ……んっ……ぐく……ぐく……」
顔にびゅっと吐き出された精子。半開きの真奈の口にびゅっと放たれ、反射的に彼女は飲み込んでしまう。

「いやん……先生……出すなら出すって……んっ……ああん……」
おっぱいが白い液体で汚されていく。

粘り気と臭気を放つオスの欲情の果て。

真奈は顔におっぱいに下腹部にそれを受け、しばし放心していた……。

「んっ、んっ、んっ……」
ぬちゅぬちゅ……ぬちゅぬちゅ……。
「はっはっ、はっはっ……」
ぴたんぴたん……ぬちゅぬちゅ……。
風呂場で横たわる勝行と、それに跨る真奈。



徐々に日も落ち、照明を切っているお風呂場は暗くなるけれど、ぶるんぶるんと揺れるおっぱいはよく見える。勝行は時折思い出したようにそれに手を伸ばし、先っぽで尖った乳首を抓む。

「ああん！ んっ、先生、悪戯しないで……んっ……」
ぬるぬると滑るローションを股間にたつぷりと塗りたくった二人は互いの局部を擦り合わせて気持ちを高めていた。

「んっ……んっ……んっ、んっ……」
乳首に触る手を振り払い、真奈は目を瞑って身体を前後させる。ローションには白い濁り汁が混じっている。先ほどびくんと震えた時にぴゅぴゅっと出た分だ。

勝行に跨ったまま前後している内に頭がぼーっとなり、股間からじゅくじゅくと刺激が沸き起こり身体がびくびくと震えた。

身体がきゅっとなり、涎が溢れて涙もこぼれた。最初こそ苦しかったけれど、ぷつと糸が切れるように解放されると身体がふわあっと軽くなった。意思とは無関係に身体がびくびく震えてしまい、その仕草を見られて嗤われた。

その感覚がイクということらしい。

真奈はイッタ後も行為を求められ、そのまま勝行に跨り、割れ目でチンポを扱いていた。

「んっ……んっ……んふう……はあはあ……」

割れ目で感じる男の人の性欲は逞しいと思えた。けれど、どこかどかしい。さっきはあんなに開放感に包まれたというのに、今はどこか突き抜けない。物足りないという気持ちだった。

「どうした？ 今野、つまらなそうだな」

「そんなこと……」

肯定すべきか否定すべきか微妙な問いかけにしばし口後籠る。けれど勝行は気にせず上半身を起こすとまたもおっぱいを強く揉む。

「ああん……」

強い刺激に声が上がずる。痛くない。心地よい。そんな刺激に代わっていた。

「んっ……せんせい……ああん」

「ん？ どうした？ そんな甘えた目をして……」

「そんな目、してないし……」

「してるぞ？ 今野は素直じゃないな？ キスしてもらいたいのか？」

「別に……んちゅ……んむ……ふはあ……んもう、先生……急にんちゅ……」

「んちゅ……ちゅう……んむ……今野、先生、もっと今野のこと知りたいぞ？ ん？」

「そんな、これ以上って……んっ……あ、だめ……先生……」

押し倒され、おおいかぶさってこられると恐怖が蘇る。

多少の快楽で油断していたが、自分はそのままでするつもりはない。けれど勝行は自分のモノを握り、それを割れ目にあてがい、探る様に前後させて来る。

「やめ、先生……それはだめ……んっ……ああん……」

「そうか？ そんな切ない声出して嫌なんて……今野は本当に素直じゃないな……どれ……先生が後押ししてやるぞ？」

ぐいっと押し付けられたチンポ。何度も割れ目で擦っていたせいか皮が捲れ上がり、赤い亀頭が見えていた。それは熱を籠らせて尖り、ふにやふにやにふやけた真奈の割れ目へと押し付けられる。

「んっ、だめ……ああん、先生……そんなことしちゃいや……だめ、おねがい……ああん」

ぐいっと押し付けられたチンポに真奈は抗う術も無い。ローションが垂れた床では踏ん張

ることもできず、勝行の身体が被さってきた。

「んっ……ああん……んうくう……くう……くはあ……」

「んっ、んう……お、おお……今野の中、きつついな……うう……」

ずぶぶつとめり込んでくる異物。苦しさ呼吸が止まる。同時に内側で男の人の体温を感じる。熱い気がする。それと逞しい。固くて乱暴で……。

「んっ……だめ……うごいちゃ……んっ、苦しいの……」

「力んじゃだめだ。もっと力を抜くんだ……ほら、こうして……」

背中を撫でられ、乳首を撫でられるとくすぐったさに気持ちちがぶれる。そんな隙にぬぷつとさらにねじ込まれる。

「んっ……はあん！ くふうん……あっ、あっ」

さらに忍び込む勝行のチンポ。口が開き、ぱくぱくと呼吸を繰り返す。

「ああ、すごいなあ、今野のマンコ……先生のチンポをぎゅっとしてくれてるぞ。そんなに先生が好きか？」

「先生なんて好きじゃないです……んっ……酷い、こんなこと……んっ……ああん」
抵抗しようにも身体を貫かれたショックで身動きが取れない。そして勝行が少しでも動くとその振動がびんびんと股間から身体中に広がってしまうのだ。



それは最初こそ痛みに思えたけれど、だんだんと快樂へと変わっていく。

「んっ……んっ……んっ……ああん」

甘い声が漏れ、口の中が粘つく。そこを見透かされてまたキス。

「んちゅんちゅ……ちゅう……んちゅ……」

舌を交わらせて唾液を吸い合う。ねちよねちよと音を立てながらのキスは少女漫画で見るような美しさが無い。生臭い絡み合いでしかないのに、それでも脳裏に深く刺激が焼き付けられる。

「んうふう……ちゅ……ちゅ……先生……んちゅ……キス、しちゃいや……んちゅ……んちゅ……はあん、あむちゅ……はむはむ……ちゅ」

唇を唇で挟んで唾液を擦りつけるような仕草を繰り返す。ちゅつと吸って舌を付き合わせ、涎をぐくんと飲み込み、ようやく口を離す。

勝行は満足そうに笑うと、ゆっくり身体を前のめりにさせて来た。

「んう……くうん……あはあん……はあはあ……先生……きもちいい……んっ……はあん……あ、また……んっ」

チンポが奥へとねじ込まれると苦しいけれど気持ちが良い。二度三度、繰り返される内にどんどん快樂へと変わっていき、身体のコわばりが消えていた。

「んっ……んっ……んっ……ああん……先生……んっ、はあん……んっ！ んっ！」

気付くと勝行の首に手を回していた。自分から彼にしがみ付く格好になり、唇にキスをしていた。

「おいおい、今野、激しいな……んっ、んっ、嬉しいぞ……今野がそんなにエッチな子なんてなあ……くく……はあはあ……」

「先生……んっ、おちんちん……すごい……かたくって……あたし、なんか、わかんなくって……なんかああん……きもちよくって……んっ……」

ぬちゅぬちゅぬちゅ……ぬっぶぬっぶ……。

粘っこい音を立てながら前後する勝行。チンポはその動作に伴って真奈のマンコを挟み、弄る。

「くう、良い締め付けだぞ……今野はエッチな女の子だなあ……、感心感心」

余裕を見せようにも勝行も絞られる。

真奈の膣壁は勝行のチンポを執拗に絡みつき、撫でまわし、射精を促そうとしてくる。

どくどくと我慢汁を膣内に零し、ぬめり気を良くしていく。最初よりずっと早いピストン運動に二人の声も早くなる。

「んっ、んっ、んっ……ああん！ くふうん！ んっ、んっ、んっ！」

「はあ、はあ、はあはあ……！ くっ、今野……いい、ぞ。すごく気持ちいいぞ」

「ああん、先生……んっ、きもちいいです……んっ！ ああん、やあん、おちんちん……すごいキモチイイの！ んちゅ……ちゅう……先生……んちゅ……ちゅ」

しがみ付き唇を求めて窄める真奈。キスするとチンポがビクンとするのがわかる。膣内にびゅっと我慢汁を吐きだされると交尾が滑らかになってもっと気持ち良くなれる。だからキスをしたい。

「んちゅ……ちゅ、ちゅう……せんせい……はむ……んちゅ……はあんっ、んっ、んっ！
ああん、先生、もっと、もっと激しくしてほしいです、んっ！ ああん！」

足を勝行のお尻の辺りで交差させ、身体が離れすぎないようにしがみ付く。

ぬっちゅぬっちゅと音を立ててチンポが出し入れされる様をちらりと見ると、今セックスをしてしまっているのだと理解できる。

「んっ……ああん、すごい……んっ、すごいきもちいい……んっ、先生、もっと……んっ、もっとください……んっ！」

甘えた声を恥ずかし気もなく叫び、勝行にしがみ付いて催促する。けれど勝行もこれ以上は我慢できないのか、答えに窮す。

真奈のマンコの中ではチンポがびくびくんと震えて我慢汁に濁りを含ませていた。そろそろ射精しかねないほどとなり、勝行は焦る。

「くう、今野……出る、出るぞ……くう」

「んっ、先生……んっ！ んっ！ あたし、あと少し……んっ！ ああん！ あ、いく！
いきます、いっちゃいます！ 先生のオチンチンであたし、いっちゃいます！」



「くう！」

媚びる真奈の悲鳴に勝行は我を忘れる。本当ならしがみ付く真奈を突き飛ばしてでも外に射精すべきなのに、彼女が愛おしくなり最後まで繋がっていたくなる。

「真奈、出すぞ！　ぐ、出る！」

「ああん、先生！　あ、おちんちん、今ビクンって！　ああん、くう……くう……ああん！　やだ、んっ、すごい元気！　んっ！」

しばし射精の我慢で大人しくしていたチンポだが、びゅつと欲望を吐きだすと途端に瓦解し、びゅつびゅつと真奈の膣内で射精しまくる。

「んっ！　ああん、せんせいのおちんちん！　すごい、んっ、すごいすごい！」

びゅつびゅつと射精しまくるチンポはびくびくと収縮し、真奈の膣内を侵していく。

「んっ……んっ」

絶頂を迎えた敏感な膣内で暴れるチンポに真奈はそのまま脳内が焼き付きそうな感覚に襲われる。

「すごい、すごいきもちいい……んっ……だめえ……すごい……んっああん……」

勝行にしがみ付き、膣内で暴れ回るチンポのおさまりを振るえて待つ真奈。二度目であるのに溢れる程の精子が結合部から溢れ、ローションに混じってマーブル模様を造り出す。

「んっ……ふうん……ああん……先生……んっ……はあはあ……」

「くう、今野……先生なあ……くう……気持ち良かったぞ……」

「んっ……あたしも……」

倒れ込む勝行に真奈は心地よい疲労感を覚えていた……。

